

令和 2 年 7 月 6 日現在

機関番号：33910

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K03242

研究課題名(和文)越境するトルコ農村女性の民族誌

研究課題名(英文)Ethnography on Turkish rural women abroad

研究代表者

中山 紀子(NAKAYAMA, Noriko)

中部大学・国際関係学部・教授

研究者番号：00288698

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：初年度にトルコでクーデター未遂事件が起こり治安が悪化したためトルコでの現地調査をあきらめ、これまでに得ていた民族誌資料を国内においてより精緻なデータ化に専念せざるを得ないなど、大幅な計画の見直しを迫られた。しかし、結果としてデータの精緻化によって女性に関わる重要なテーマを複数発見することにつながり、次年度にはかつて出版した女性たちのスカーフ着用についての解釈を見直し、あらたな論文を出版した。また27年前の調査を基に出版した代表者の著書『イスラームの性と俗 トルコ農村女性の民族誌』(1999年、アカデミア出版会)をトルコ語に翻訳し、最終年度に完成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本ではまだ数多いと言えない西アジアの農村女性について民族誌の再構成を試みた。シリアやイラクにおけるイスラム国の出現などにより、日本を含め世界的にイスラーム教徒に対する理解が事実から歪んでいくなか、報告者が30年近く交流を続けているトルコのある村の女性たちのドイツへの移民状況やそれにとまなう生活戦略を紹介していくことによって、自分たちと実はさほど変わらぬ彼ら、彼女らの姿からイスラームという他者理解につながる。さらに30年近く経過した歴史的な民族誌を今後も継続して作成することが可能になった。

研究成果の概要(英文)：At the first year of the Project, the attempted coup was occurred in Turkey, the situation over there were not suitable for the field work. I gave up to go there and was obliged to change the plan to research and refine the ethnographical data which I obtained from the anthropological field work which I conducted 27 years ago. But as a result, through refining the data, I could find another thema on the meaning of wearing the scurf of Turkish rural women, so that I published the essays on the thema. Beside I could complete the translation of my book "Sexuality and secularity in Islam: the ethnography on the Turkish rural women" into Turkish language at the last year of the Project.

研究分野：文化人類学

キーワード：トルコ 女性 農村 移民 性 ジェンダー

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の前段階として行なった「トルコ人移民と出身国とのネットワーク構築に関する文化人類学的研究」(基盤研究C 2009-2011 年度 研究代表者:中山紀子)によって、トルコ人移民の出身地の村とのネットワークは、おもに移民と出身村に住む家族・親族関係を通しての婚姻関係や互酬関係に支えられていることが明らかになった。本研究では、この結果をふまえ、家族・親族関係のかなめである女性を、「越境する農村女性」として研究対象にし、彼女らの生活戦略に注目した。

### 2. 研究の目的

本研究は、報告者が27年前に長期の人類学調査を行なったトルコのある農村からヨーロッパ、おもにドイツに移住した女性たちのライフヒストリーを集め、彼女たちの生活のなかで重要な位置を占める出身地の村とのネットワーク関係に注目し、国際移動というグローバルな状況のなかでよりよい生活を目指して彼女たちがとる生活戦略を文化人類学的に考察することを目的とする。

### 3. 研究の方法

研究方法は、大別して、1)現地調査、2)文献調査、3)基礎資料のデータ化の3つであるが、初年度の2016年にトルコでクーデター未遂事件が起こり治安が悪化したため、計画の見直しを迫られた。それともなってトルコでの現地調査を縮小するなど本研究の方法も変更せざるをえなかったが、これまでに得ていた民族誌資料の精緻なデータ化、同じテーマの通時的な研究論文執筆、著作物のトルコ語訳や英語訳を遂行することになり、研究はむしろ深化したといえる。

### 4. 研究成果

#### (1) 現地調査による研究成果

最終年度にはM村の人々を再訪し現在の状況を聞き取り調査することができ、ドイツにかかわるM村の女性たちの様々な状況がわかった。具体的にはたとえば、母方のイトコと結婚するためにドイツに行ったが2人の娘を生んだあと夫の女性問題によって別居せざるを得なくなった女性がいる。しかし、彼女は離婚せずにいくつもの仕事を掛け持ちし、週末には畑仕事をして節約しながら蓄財している。夫の父は彼女にとって叔父にあたり、夫との別居のあと夫の両親と交流を続けている。彼女はドイツで運転免許を取得し車を駆使して仕事をこなし、トルコの村の近郊のE町には帰省用の家も買っている。「自分の人生は小説のようだ」と言いながら着実にドイツやトルコ両方に足場を築いている。また、M村の人々の多くは村を出て近郊のE町に住むようになっているが、ドイツに住む親族との関係がこの近郊のE町の生活にも影響を与えている。ある家族の場合、ドイツに住む弟夫婦がトルコに帰省した際に住むためのアパートをE町に所有しているが、トルコに住む兄夫婦がM村から引っ越してそのアパートに住んでいる。兄には仕事がなく兄の妻がE町の大きな工場の食堂に働きに出ている。この兄弟には妹がいて彼女もドイツで結婚して豊かな暮らしをしている。兄は性別役割規範によって家事をすることはなく、兄の妻は仕事にも行き家事も行って、かなり疲弊している。兄は自分の弟が所有するアパートに住むことで無職であることの罪悪感が薄まっているのかもしれない。ドイツ在住の親族との関係によって、兄の妻に大きなひずみが生じている。ほかに、ドイツへの出稼ぎ労働者であった男性が3人息子のうち末っ子だけをドイツに連れて行ったことでそれぞれの息子の妻たちの仲が悪くなった事例もある。また、ドイツ生まれの夫と結婚したが、夫が麻薬問題で国外退去になりトルコで暮らさざるをえない女性も存在する。このようにドイツと女性をめぐる多様な状況がある。いっぽう、現在M村にはロシアに出稼ぎに行きトルクメン人やキルギス人の妻を得て暮らしている男性、ドイツではなく、ブルガリアやサウジアラビアなどに出稼ぎに行く男性が増えるなど、グローバルな状況はドイツに限らず広がっている。こうした現状を踏まえて、調査地の人々と共に新たな民族誌を描く必要性を再認識した。調査地のM村は過疎化が進んでいるが、M村に生まれた若者たちは自分たちの拠り所として故郷の村に関心を高めている。SNSなどによる彼ら自身のさまざまな活動を通して、今後は現在を映し出す民族誌を彼らとともに作り上げていく。

#### (2) 文献調査による研究成果

2017年度に論文「テセツェル(tesettur)とヒジャブ(hijab)についての覚書き」を出版した。27年前の調査時に検討した女性のありかたにおいて、スカーフ着用をめぐる問題が農村女性とそれ以外の女性を分けるテーマとして立ち上がっていた。ところが、現在のイスラーム・ファッションの隆盛によってこのテーマが新たな展開を見せている。調査当時は、トルコの都会において女性のスカーフ着用が世俗主義者がイスラーム主義者を分ける政治的な象徴になっていた

が、そのいっぽうでスカーフ着用に通融無碍に応じる農村女性が、トルコの「現代化」を体現する存在ではないかと報告者は結論付けた。現在のファッションナブルなスカーフ着用の隆盛がどのように「現代化」と関わるのかについて検討を行なったところ、スカーフ着用がかつて「宗教的」よりも「政治的」となっていたとみなされていたように、現在は、「政治的」よりも「商業化」「商品化」とみなす必要が出てきていることが理解された。なお、論文を執筆する過程で、トルコの小売店で働く低所得者層の女性たちを調査した、Feyda Sayan-Cengiz の論考に触発された。彼女は、就職のためならスカーフを外してもかまわないと考える多くの女性に会っている。彼女はこれまでの研究の対象が高学歴のエリート女性に偏っていたことを指摘し、対象から漏れ落ちている女性たちがいることを明らかにした。報告者の調査対象である農村女性と都会や町の小売店で働く低所得者層の女性たちは似ている。報告者が20年ほど前に指摘した「観念よりも生活実感に即した、しかも現実社会との対応のなかで揺らめく個々人」(中山1999:218)に注目する重要性はまだ有効と言えそうだ。なお、この論文は英語に訳され、現在掲載する雑誌を検討中である。

### (3) 基礎資料のデータ化による研究成果

これまでに得た M 村に関する基礎資料をデータ化した。おもに M 村の人口台帳と家系図をもとに親族集団ごとにまとめる作業を行なった。また、当科研課題の「越境するトルコ農村女性の民族誌」に大きく関わる報告者の著書『イスラームの性と俗—トルコ農村女性の民族誌』(アカデミア出版会、1999年)の全文をトルコ語に訳した。訳者はトルコのチャナッカレ・オンセキズ・マルト大学准教授のトルガ・オズシェン氏である。彼自身も日本の熊本で長年農村調査をした経験をもつ社会学者である。彼によれば、西洋人ではなく日本人文化人類学者がトルコの農村をどう見たのか、またこの本が扱っている1990年代がトルコにおいて現在ある種ノスタルジーをもって語られ始めていること、さらにこの時期が現在のトルコの政治的な状況を理解するための重要な時期であること、それにもかかわらずトルコではこの時期の音楽や小説などの分野しか取り上げられていないことなどから、この翻訳は貴重な価値をもっている。この翻訳は当時の政治的、文化的な女性に関する議論が展開されているだけでなく、トルコ農村の規範、社会構造、日常生活から理解される農村女性の融通無碍のあり方がトルコ全体の女性に関する議論への果敢な挑戦になっており、トルコの学界に大きな貢献となると学術的に評価してくれた。現在、翻訳を勧めてくれたトルコのボアジチ大学教授のセルチューク・エセンベル氏の協力を得てトルコの出版社と交渉中である。また、こうして日本の農村を研究するトルコ人社会学者と学術的に連携したことによって、今後日本とトルコの農村研究を共同で行う契機になった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中山紀子	4. 巻 13号
2. 論文標題 水への希求心 イランにおける2015年春フィールド日誌より	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 貿易風 中部大学国際関係学部論集	6. 最初と最後の頁 81-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中山紀子	4. 巻 Vol.7
2. 論文標題 イスラームに覆われた自然崇拜 ウズベキスタンの水源信仰に関する 2017 年度基礎調査	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Afro-Eurasian Inner Dry Land Civilizations	6. 最初と最後の頁 39-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山紀子	4. 巻 12
2. 論文標題 テセツェル（tesettur）とヒジャブ（hijab）についての覚書き	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 貿易風	6. 最初と最後の頁 38-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山紀子、伊藤正晃	4. 巻 17
2. 論文標題 ハイブリッド・プロジェクト始動！ 国際関係学部の新たなる挑戦	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 中部大学教育研究	6. 最初と最後の頁 45-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中山紀子
2. 発表標題 女性と水源信仰 トルコ、イラン、ウズベキスタンをめぐる地域横断的試論
3. 学会等名 2018年度第1回アレヴィーノベクタシ研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中山紀子
2. 発表標題 トルコ共和国初代大統領ムスタファ・ケマル・アタテュルクの世俗化政策
3. 学会等名 第4回アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明の近代動態シンポジウム「西洋海洋中心文明のグローバル化とアジア・アフリカ社会」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中山紀子
2. 発表標題 トルコ文化の近代史
3. 学会等名 アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明の近代動態シンポジウム第1回「中央アジア・中東文明の近代史」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中山紀子
2. 発表標題 ウズベキスタンの水源信仰についての基礎調査報告
3. 学会等名 2017年度第1回アレヴィーノベクタシ研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中山紀子
2. 発表標題 アタテュルクのイスラーム政策：トルコの近代化と女性をめぐる議論を中心に」
3. 学会等名 2017年度第2回アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明の近代動態シンポジウム「アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明の近代動態」
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 中村 都、李 善愛、伊藤 和子、上村 雄彦、ウー、グレース、岡田 仁子、落合 栄一郎、片岡 信之、清末 愛紗、小池（相原） 晴伴、小林 知子、鈴木 晃志郎、妹尾 裕彦、道券 康充、遠井 朗子、永井 真理、永澤 雄治、中根 智子、中原 ゆかり、中山 紀子ほか	4. 発行年 2017年
2. 出版社 法律文化社	5. 総ページ数 250
3. 書名 新版 国際関係論へのファーストステップ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----